

城北信用金庫所属のアスリート職員の原点を知る

# ATHLETES ZERO

limited edition  
[アスリートゼロリミテッドエディション]

vol.3



スポットインタビュー

## 清水珠夏

「嫌いになるまでやりきる」

ATHLETES ZERO limited edition vol.3 2018年9月発行

text by Hiraka Hoshino / photographs by Atco Kawabe / designed by Megumi Inano / directed by Tomomi Oishi



城北信用金庫は、所属するアスリートを介して、スポーツの万能性への理解を深めることで、より豊かな社会づくりを目指します。

Webにて公開中

### ATHLETES ZERO

アスリート職員による、日々の出来事や成長をつづったブログ等をご覧ください



### Johoku Athletes Club

特設Webサイトにて、アスリート職員の活動報告をご覧ください



JOHOKU SHINKIN BANK

陸上競技・走り幅跳び

# 清水珠夏



## 嫌いになるまでやりきる

走り幅跳びが好きでたまらない清水選手。進学、就職、転職…全ての選択が競技のためだった。無我夢中で練習を続ける日々は、彼女にどんな変化をもたらしたのか。

### PROFILE

清水珠夏

Tamaka Shimizu

1991年6月22日生まれ A型 神奈川県出身

【戦績】第100回 日本陸上競技選手権大会 ... 3位  
第22回 アジア陸上競技選手権大会 ... 4位

1991年6月22日に神奈川県で生まれたたまちゃん。幼い頃から父親の仕事の都合で引越しを繰り返していた。外遊びが大好きで、いつも傷だらけになりながら男の子たちに混じってサッカーをしていた。そんなわんぱく少女が走り幅跳びを始めたのは、中学校で陸上部に入部したことがきっかけだった。

### ダンサーにも憧れた少女は中学で幅跳びに魅せられる

「体を動かすことが大好きでした。小学3年生の時にディズニーで見たダンサーに憧れて、バレエを習ったんですけど、おとなしく踊るのは私には合ってなかったみたい。陸上に出会って、バレエは辞めちゃいました」  
走ることが大好きで、周りより足が速い自信もあった。中学1年生の頃に顧問の先生の方針で陸上競技の全種目を1年通して経験する。その中で彼女が選んだのは「走り幅跳び」だった。  
「ジャンプに手ごたえを感じたわけではないんです。最初に出了た市の大会の種目がたまたま走り幅跳びで、予選通過まであと1センチ届かなかった。すごく悔しくて、次は絶対に予選を通過してやると思いました」  
3年生で全日本中学校陸上競技選手権大会4位入賞を果たす。しかし、この結果は彼女にとっ



て少し意外なものだった。  
「全国大会に出られてラッキーくらい心の構えでした。大会当日は雨。多くの選手が調子を崩す一方で、私は雨が気にならなかった。だから周りが勝手に落ちた感じ。表彰台に立てればいいなとは思っていたけど、勝ちたい気持ちはなくて。楽しくて好きだから今後も続けられたらいいなという考えでした」

「雨が苦手な選手が多いけど、私はへっちゃらです」

### 負けて気づいた勝利へのこだわり

「入ったらいんターハイ(全国高等学校総合体育大会)で優勝争いするような優秀な選手ばかりで、最初は戸惑いました。練習

内容もハイレベルだったし、先輩も厳しかった。それでも走り幅跳びが好きっていう気持ちがあったから続けられました」  
2年生の時に出場した関東高等学校陸上競技大会で2位に入賞し、インターハイ出場権をはじめて手にする。そのインターハイでは惜しくも入賞を逃し、結果は9位だった。

「私は出場できただけで満足だったけど先生は違っていた。『お前は底力が足りない。勝ちたくないのか?』って怒られて。その時ハッとしました。このときから競技に対して勝つことを意識するようになりました」

翌年のインターハイは見事7位入賞。これで自信をつけた彼女は、トップクラスで戦える選手になるため、スポーツの名門・中央大学への進学を決める。

「6メートル跳ぶという高校時代の夢は叶わなかった。だからあえて練習量日本一といわれる大学を選びました。4年間がむしゃらに陸上をして、引退しようと思っていました」  
1年生の秋には早々に6メートルの目標を達成。その後も徐々に力をつけていき、3年生の時には関東学生陸上競技対校選手権大会(関東インカレ)と学生の個人日本一を決める日本学生陸上競技個人選手権大会で優勝する。続く4年生では関東インカレ連覇を果たした。

### 一度は引退を考えたも社会人アスリートの道へ

卒業後は走り幅跳びを辞めて、一般企業で働こうとしていたが、就職先の社長の厚意で競技を続けられることになる。

国内最大の大会である日本陸上競技選手権大会(日本選手権)優勝を新たな目標に掲げた。社会人アスリートとして、通常の勤務時間より早く退社し、地元のスポートクラブで練習する日々をスタートさせたが――。

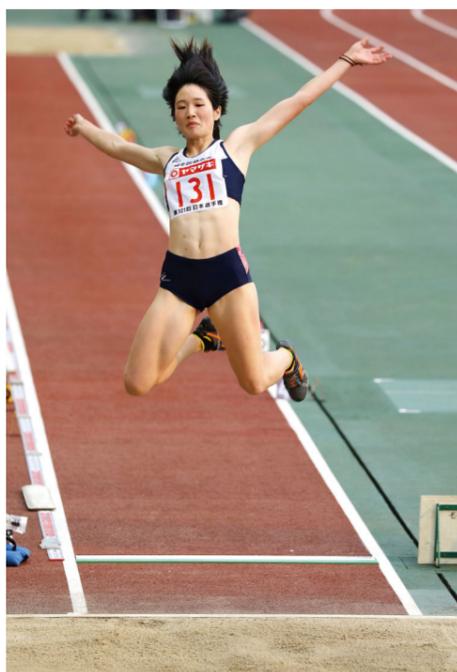
「走り幅跳びを始めた時からずっと腰のヘルニアに悩まされていたけど、会社に入ってから悪化してしまって、大会に出場できなくなってしまったんです。これを機に練習をストップ。会社でも徐々に仕事が優先されるようになっていきました」

るようになり、思うように練習ができない日々が続いた。  
「引退も考えましたが、どうしてもあきらめきれなかった。競技を続けるために転職することを決めました」

### 小学校での特別教室 出会いが彼女を強くする

地域の人と関わる仕事があったという思いから、日本オリンピック委員会(JOC)の就職支援制度「アスナビ」を介して、2015年、城北信用金庫に入庫する。

「週3回の午前勤務以外の時間を練習に充てています。腰の調子が悪いときはケアに時間を割けるようにもなりました。競技優先にさせてもらっていることがとてもありがたいです」



2017年に行われた日本選手権でも4位入賞

へとつながっていく。今年の9月にも走り幅跳び教室の開催が予定されている。

### 今後の目標は日本選手権自己最高記録で優勝したい

昨年7月に行われたアジア陸上競技選手権大会では初めて日本代表に選ばれ、4位という好成績を残した。

「日本選手権で自己ベストを出して優勝することが直近の目標です。そして2020年夏、走り幅跳びの日本代表として新国立競技場に立ちたい。陸上競技は今しかできないので、これ以上無理だっところまでやりたいですね。今後は国際大会でも結果を残したいです」  
トップアスリートへの階段を上る清水選手。最高の舞台を目指し、世界へ羽ばたいていく。

## 「怪我をしても休みません。その時できる事を徹底的にやります。」



「続けたくても環境がなくて引退を選ぶ人が多いです」